

H 2 6 年度霧多布沖合調査

N P O 法人エトピリカ基金



H26 年度霧多布沖合調査

1) 目的

北海道東部に位置する浜中町霧多布周辺ではエトピリカやケイマフリといった希少海鳥の保護・調査活動が展開されているが、最も基本となる海上の鳥類相とその季節変化については不明な点が多い。ここ数年の調査で、夏から秋にエトピリカ若鳥やカンムリウミスズメ、アホウドリ類などの希少海鳥が多く見られることが明らかになってきたため、本年度は同時期に集中的に調査を行い、分布や数を把握して今後の保護活動に役立てることを目指した。

2) 調査方法

調査は 2014 年 7～10 月に計 4 回、「第八栄徳丸」（堀場伸也船長 4.9t；写真 1）を傭船して行なった。堀場船長には記して謝意を表する。

調査地は北海道厚岸郡浜中町の海域で、同町霧多布港を出港して浜中湾を東進、約 5km 沖合のホカケ岩を經由してそこから 7km 程度東の北緯 43 度 05 分、東経 145 度 16 分付近で南へ変針し、約 30km 先の北緯 42 度 50 分、東経 145 度 19 分付近で西へ変針。12～13km 西方の北緯 42 度 50 分、東経 145 度 10 分付近で北へ変針し、霧多布岬東方海上を經由して霧多布港に戻る 5 時間半前後のルートを走行した（図 1）。

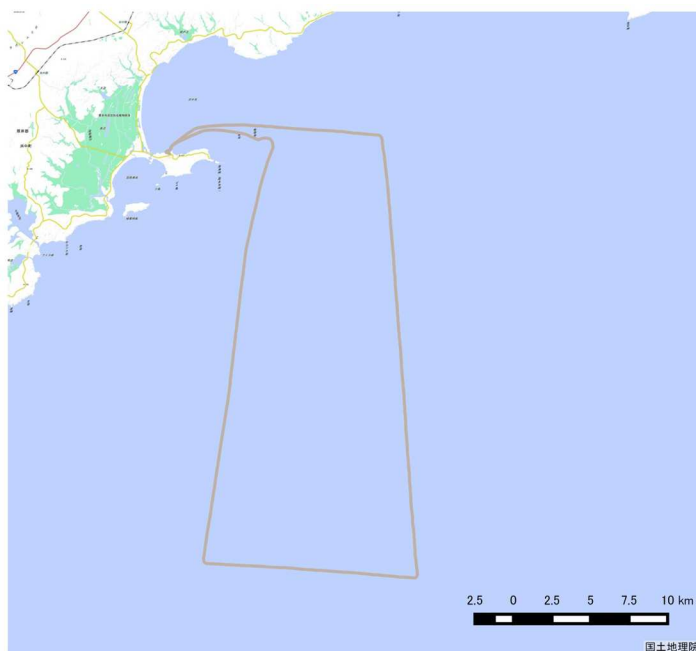


図 1. 基本的な調査ルート

各月の調査日、時間、気象条件を表 1 に示した。調査時間は日長や海況、他の漁との兼

表 1. 調査日ごとの時間および観察条件など

年	2014			
月	7		8	10
日	3	26	18	9
時間	7:00– 12:22	8:29– 13:07	8:58– 14:36	6:57– 11:55
天候	曇り 霧	曇り	晴れ	晴れ
波	1m	0.5m	0.5m	1m
風	0	1	1	1
視程	300m–水 平線	水平線	水平線	水平線

ね合い等で月によって異なるが、結果としてはほとんどの調査が午前中から午後の早い時間にかけて行なわれた。

調査は、船の舳先の左右に各 1 名以上の調査員を配置して行ない、それらの間に記録係が入り、調査員が口頭で伝える

情報を野帳に記録した。港を出てから戻るまで、通常より低速（10 ノット前後）で航行し、調査員は 10 倍前後の双眼鏡で目視調査を行なった。原則として片側約 200m（両側 400m）に出現する鳥類ならびに哺乳類について、発見時刻、種、数、行動（飛翔、海上、上陸等）、左右の別等を記録した。距離や角度等により種まで同定できない場合は、「ウミガラス sp.」や「ミズナギドリ類」等種より上位の分類群で記録した。また、岸壁から港の出入口までの漁港内はカモメ類やカラス類等、人間活動によって誘引された鳥が明らかに多いと考えられたため、種のみ記録し、個体数ほかは記録しなかった。出現した海鳥、海獣類は、可能な限り 400mm 望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS7D）で写真撮影を行ない、識別や羽衣の調査に役立てられるように心がけた。また、出港から帰港まで、GPS（Garmin 社製 GPSmap62SJ ならびに同 60CS）で位置情報を取得した。

3) 結果及び考察

第 1 部 海鳥

(1) 出現した科ならびに種数

4 回の調査で表 2 に示したように、15 科 42 種の鳥類と 16 の不明カテゴリ（「黒色ミズナギドリ類」、「ヒレアシシギ sp.」、「エトピリカ？」等）が記録された。不明カテゴリは観察条件が悪いため種の同定に至らなかったものが大部分で、海鳥では未記録の種を含んでいる可能性は低い。陸鳥（アマツバメ、オジロワシ、ハシブトガラス、ハクセキレイ）を除いた海鳥の科ならびに種数は、11 科 38 種であった。

表 2. 調査日ごとの鳥類の種またはカテゴリ別確認数 ●は港内のみでの確認

No.	科名	種名／月日	7		8	10
			3	26	18	9
1	カモ	シノリガモ				25
2		クロガモ				8
3		ウミアイサ				7
4	カイツブリ	アカエリカイツブリ				2
5		ハジロカイツブリ				1
6	アビ	アビ				2
7		オオハム				1
8		シロエリオオハム		28	12	23
9	アホウドリ	コアホウドリ	26	12	63	49
10		クロアシアホウドリ	23	117	141	37
11	ミズナギドリ	フルマカモメ	117	205	9	216
12		オオミズナギドリ		1	5	528
13		ハイイロミズナギドリ	547	978	106	2663
14		アカアシミズナギドリ	1	8	2	12
15	ウミツバメ	コシジロウミツバメ	65			
16		ハイイロウミツバメ	11	1		
17	ウ	ヒメウ	2			75
18		ウミウ	9	27	31	38
19	アマツバメ	アマツバメ	●	1	●	
20	シギ	アカエリヒレアシシギ		58	6	
21		ハイイロヒレアシシギ		70	121	48
22	カモメ	ミツユビカモメ				487
23		ユリカモメ				1
24		ウミネコ	11	45	28	20
25		カモメ				1
26		ワシカモメ				2
27		シロカモメ				1
28		セグロカモメ				109
29		オオセグロカモメ	45	140	86	191
30	トウゾクカモメ	オオトウゾクカモメ			7	2
31		トウゾクカモメ		1		47
32	ウミスズメ	ハシブトウミガラス	1			
33		ウミガラス	1	10		
34		ケイマフリ	4		3	1
35		ウミスズメ		15	2	
36		カンムリウミスズメ	1	19	1	3
37		ウトウ	65	194	89	342
38		ツノメドリ	4	2		
39		エトビリカ	13	32	2	
40	タカ	オジロワシ			1	
41	カラス	ハシブトガラス		●		
42	セキレイ	ハクセキレイ				●
43	カモ	カモ類				11
44	アビ	アビsp.		2		28
45	ミズナギドリ	黒色ミズナギドリ類	60	174	4	
46	ウミツバメ	オーストンウミツバメsp.	5			
47		ハイイロウミツバメ?	1			
48		ウミツバメ類?	1			
49	ウ	ウsp.		17	10	30
50	シギ	ヒレアシシギsp.		169	6	
51	カモメ	カモメ類			7	430
52		アジサシsp.			2	
53	トウゾクカモメ	トウゾクカモメsp.		1	3	2
54	ウミスズメ	ウミスズメsp.				3
55		ウミスズメ?		4		
56		ウトウ?	5	2		
57		エトビリカ?	1	4		
58		パフィン類	1			

海鳥のうち科ごとの種数では、カモメ科とウミスズメ科が 8 種と最大で、ミズナギドリ科の 4 種がそれに続き、それ以外の科はそれぞれ 2～3 種であった。

(2) 優占種について

各調査での個体数上位 5 種の種名、個体数、相対優占度（海鳥全体の個体数に対してその種が占める割合）を表 3 に示した。8 月 18 日以外のすべての回でハイイロミズナギドリが最優占種で、相対優占度は 41.8～53.7%と高く、8 月も第 3 位で全体の 14.2%を占めた。それ以外ですべての回で上位 5 位に入った種はウトウのみで、相対優占度は 6.3～11.9%であった。2014 年夏～秋を通じての霧多布海域での優占種はハイイロミズナギドリとウトウであったといえる。それ以外の優占種は回によって入れ替わり、7 月の 2 回で 2 位だったフルマカモメは、その後は上位 5 種には入らなかった。8 月 18 日は 4 回の調査の中で唯一、クロアシアホウドリが最優占種となった。当海域の海水温が 17℃前後と 4 回の中で最も高かったため暖水を好む本種が多く飛来したのかもしれないが、ハイイロミズナギドリやウトウの数が少なかったため、相対的に占める割合が高くなったのかもしれない。10 月 9 日にはオオミズナギドリが第 2 位となり、北から渡って来たミツユビカモメが第 3 位に位置するなど、季節の進行に伴って鳥類群集の組成が大きく変化してきた様子が窺えた。

表 3 調査日ごとの優占種とその個体数ならびに相対優占度

順位／ 月日	7		8	10
	3	26	18	9
	種名 個体数(相対優占度)			
1	ハイイロミズナギドリ 547(53.7%)	ハイイロミズナギドリ 978(41.8%)	クロアシアホウドリ 141(18.9%)	ハイイロミズナギドリ 2663(48.9%)
2	フルマカモメ 117(11.5%)	フルマカモメ 205(8.8%)	ハイイロヒレアシシギ 121(16.2%)	オオミズナギドリ 528(9.7%)
3	コシジロウミツバメ 65(6.4%)	ウトウ 194(8.3%)	ハイイロミズナギドリ 106(14.2%)	ミツユビカモメ 487(9.0%)
4	ウトウ 65(6.4%)	黒色ミズナギドリ類 174(7.4%)	ウトウ 89(11.9%)	カモメ類 430(7.9%)
5	黒色ミズナギドリ類 60(5.9%)	ヒレアシシギsp. (7.2%)	オオセグロカモメ 86(11.5%)	ウトウ 342(6.3%)

(3) 貴重種について

表 4 に示した通り、今年度の調査での記録種 42 種の 1/3 近くに当たる 12 種が環境省、北海道、国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストや天然記念物等に指定されている貴重種であった。これらのうちオジロワシは海鳥ではないが、沿岸や海上で魚類や鳥類を捕食

する種であり、霧多布沿岸の重要性は高いといえる。オジロワシ以外の 11 種はいずれも海鳥であり、4 種（クロガモ、コアホウドリ、クロアシホウドリ、カンムリウミスズメ）は IUCN のレッドリストに掲載されている、世界的に絶滅のおそれのある種であることは、霧多布海域が国際的にも海鳥にとって重要なエリアであることを示唆している。

国内のリストと IUCN のリストを比較すると、国内のどのリストにも掲載されていないクロガモが IUCN リストにある点が興味深い。これらは個体数減少を反映したものと思われるが、当地周辺でも 30 年くらい前までは、数万羽のクロガモをはじめとする海ガモ類が帯状に群れているのを見ることができたとの聞き取りがある一方、近年はそのような群れは観察できない。国内ではクロガモは今も狩猟鳥だが、狩猟行政にも世界的な個体数の傾向を反映させるべきであろう。

また、アホウドリ類は環境省（クロアシホウドリを除く）、IUCN 双方のリストにおいて高いランクに位置付けされているが、北海道レッドデータブックには情報不足にすら登場しない。北海道の鳥としてのアホウドリ類が専門家も含め十分認識できていないと考えられ、アホウドリ類が人間と抱える軋轢の中には漁業での混獲やプラスチック・ゴミの誤飲等、非繁殖海域でのものも多いことを考えると、本調査の結果等を積極的に発信し、アホウドリ類採餌・休息域としての道東太平洋の重要性を強く訴える必要がある。

表 4. 本調査で確認された貴重種とそのカテゴリ

No.	種名	天然記念物	種の保存法国内希少野生動物種	環境省レッドリスト			北海道レッドデータブック				IUCNレッドリスト	
				絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危機種	絶滅危惧種	絶滅危急種	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧
1	シノリガモ									●		
2	クロガモ											●
3	コアホウドリ				●							●
4	クロアシホウドリ											●
5	オオミズナギドリ						●					
6	ヒメウ				●							
7	ウミガラス		●	●			●					
8	ケイマフリ					●			●			
9	ウミスズメ			●					●			
10	カンムリウミスズメ	●				●					●	
11	エトピリカ		●	●			●					
12	オジロワシ	●	●		●			●				
		2	3	3	3	2	3	1	2	1	1	3
IUCN: 国際自然保護連合												

(4)エトピリカについて

主な調査対象種であるエトピリカは、7月3日13羽、同26日32羽、8月18日2羽の計47羽が確認された。すべて顔の広範な白色部や目後方の房状の飾り羽、嘴基部のプレートなどを欠く1、2歳の若鳥で、成鳥は観察されなかった。当海域では、これまでも7月を中心に本種の若鳥が観察されているが、7月26日の32羽は過去最高の数である。

このことから、本年の 7 月には例年を大きく上回る数のエトピリカ若鳥が霧多布海域に分布していたと考えられる。霧多布周辺では、最後の繁殖地であった浜中小島でも 2010 年以降繁殖が途絶えており、隣接した根室のユルリ島、モユルリ島でも 10 つがい前後が繁殖するのみであることを考慮すると、これらの大部分は千島列島以北に由来すると思われる。

例年を大きく上回る若鳥の渡来について、出現した海域の特性から考察を試みる。出現海域の水深は 40～60m が最も多く、この点は NPO 法人エトピリカ基金による 2011～13 年の霧多布海域での調査結果と同じだった。しかし、同調査では全体の 2.1%しか出現しなかった水深 20～40m の海域で 6 羽（全体の 12.8%）が確認された点、水深 100m 以深での出現が 3 羽（全体の 6.4%；2011～13 年は 17%）のみだった点は大きく異なった（表 5：図 2）。

表 5. 本調査と 2011～13 年の水深ごとのエトピリカ確認数

水深(m)	確認数(%)	
	本調査 (N=47)	2011～13 年(N=49)
0-20		
20-40	6(12.8)	1(2.1)
40-60	25(53.2)	20(42.6)
60-80	9(19.1)	14(29.8)
80-100	4(8.5)	4(8.5)
100-120		1(2.1)
120-140	2(4.3)	1(2.1)
140-160	1(2.1)	2(4.3)
160-180		
180-200		1(2.1)
200-300		1(2.1)
300-400		2(4.3)
* 2011～13年データはNPO法人 エトピリカ基金による調査		

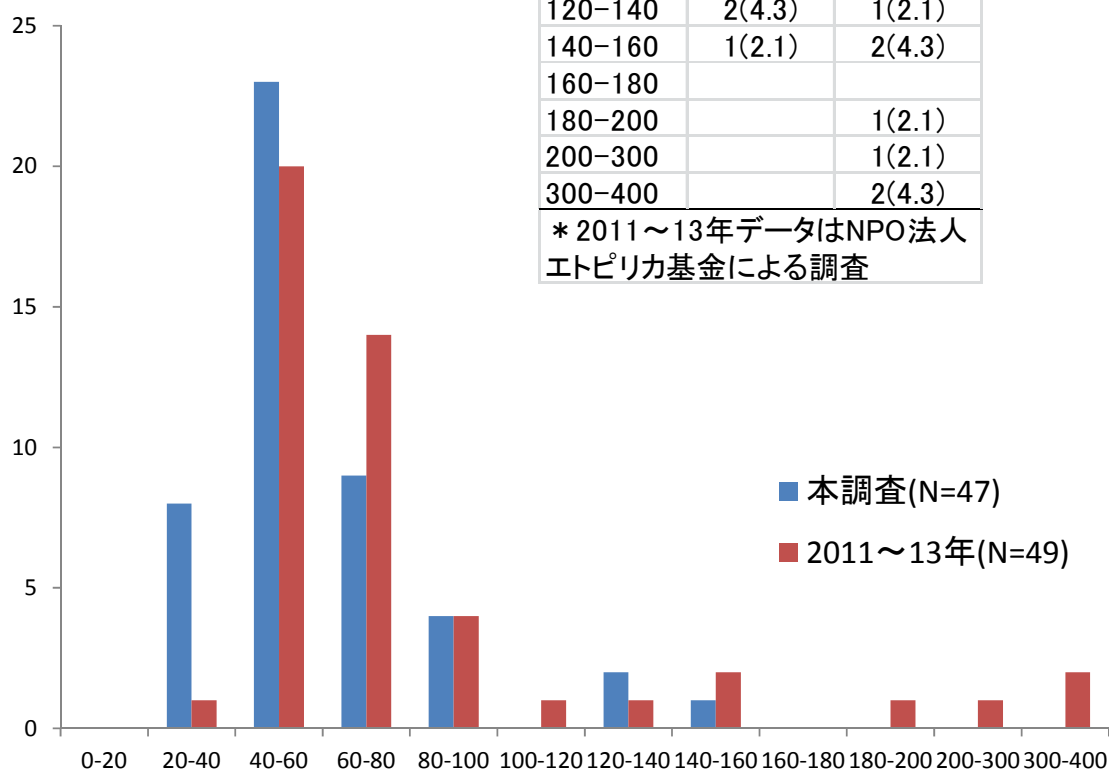


図 2. 本調査と 2011～13 年の霧多布海域における水深ごとのエトピリカ確認数

また、陸岸からの距離に関しても、15～20kmの海域で最多であった点は2011～13年の結果と一致したが、過去の調査では全体の4.3%しか出現しなかった5～10kmの海域で15羽（31.9%）が確認された点、20km以遠の海域で少なかった（7羽・14.9%；2011～13年は17羽・36.1%）点が異なった（表6：図3）。

表 6. 本調査と2011～13年の陸からの距離ごとのエトピリカ確認数

陸からの 距離(km)	確認数(%)	
	本調査 (N=47)	2011～13 年(N=49)
0-5		
5-10	15(31.9)	2(4.3)
10-15	8(17.0)	8(17.0)
15-20	17(36.2)	20(42.6)
20-25	4(8.5)	5(10.6)
25-30		4(8.5)
30-35	2(4.3)	4(8.5)
35-40	1(2.1)	1(2.1)
40-45		3(6.4)

* 2011～13年データはNPO法人
エトピリカ基金による調査

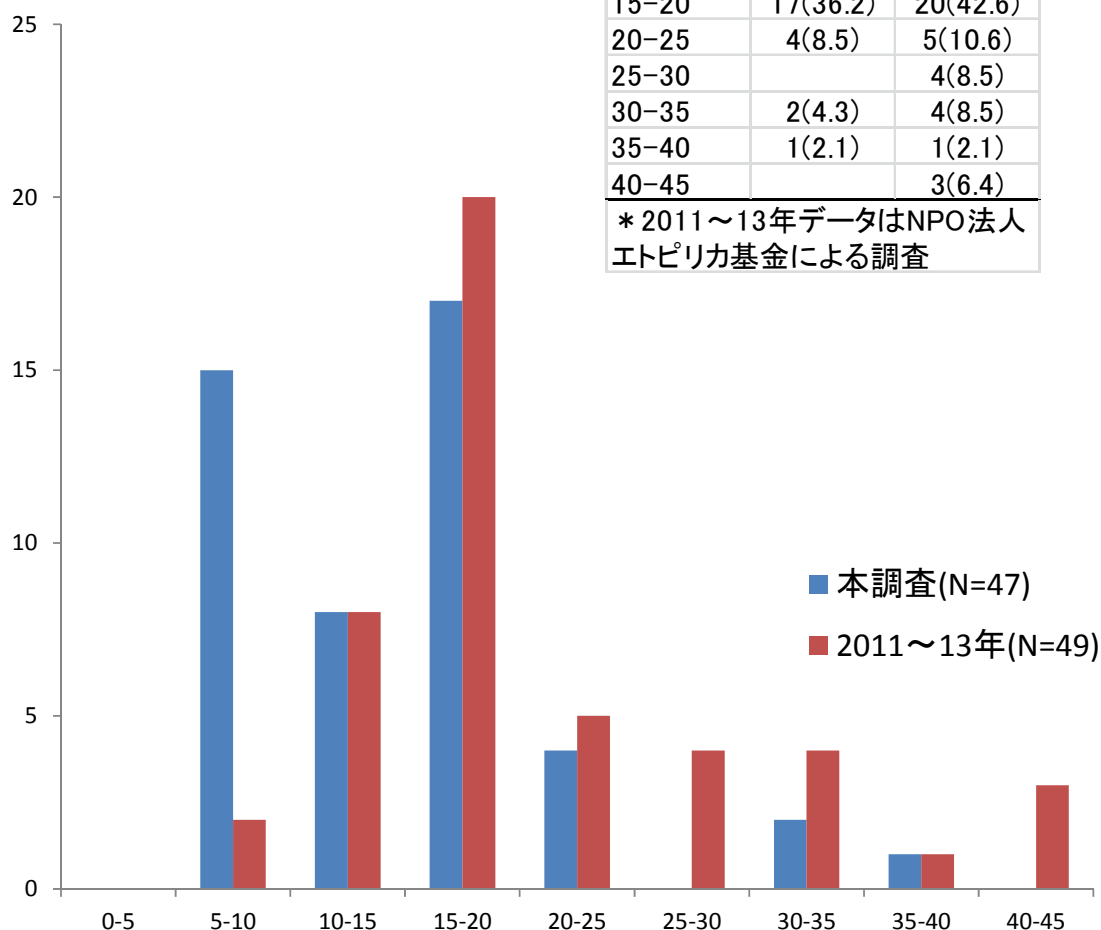


図 3. 本調査と2011～13年の霧多布海域における陸からの距離ごとのエトピリカ確認数

総じて、本年7月の霧多布海域におけるエトピリカ若鳥の分布は、例年と比べて沿岸に偏り、その数も多かったと結論できる（図4ならびに図5）。同時期に十勝（NPO法人日本野鳥の会十勝支部 未発表）や根室（道東の野鳥情報HP）でも、沿岸部で例年より多くの本種若鳥が観察されており、沿岸部への出現は道東太平洋一円での現象だったと考えられ

る。ミズナギドリ類やウトウなどの普通種が例年に比べて著しく少なかったことから餌条件が好適だったとは考えづらく、十勝では海岸や砂浜で衰弱・死亡鳥も保護・回収・観察されている（NPO 法人日本野鳥の会十勝支部・小林真樹 未発表）ことを考慮すると、本来の分布域である道東から千島の沖合で餌条件が悪く、衰弱して漂流している内に沿岸親潮に乗って道東から十勝の沿岸海上にたどり着いたと考えられる。繁殖に参加しない本種の若鳥の分布は、その時点での海洋環境を反映した餌生物の分布に影響を受けるため、海鳥や海獣といった高次捕食者を利用した海洋生態系のモニタリングにおいて格好の指標となるだろう。

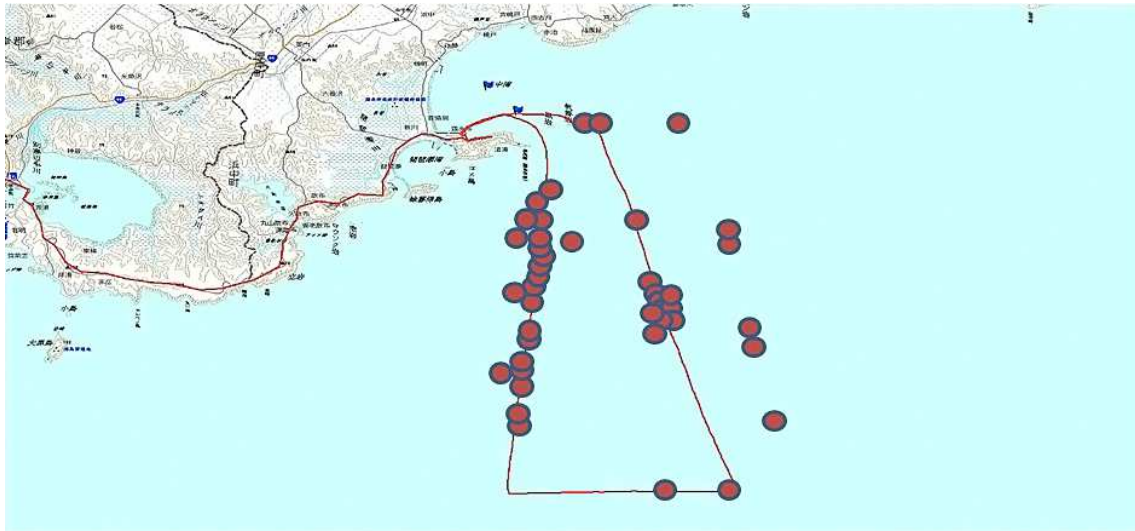


図 4. 2014 年 7～8 月の霧多布海域におけるエトピリカの分布

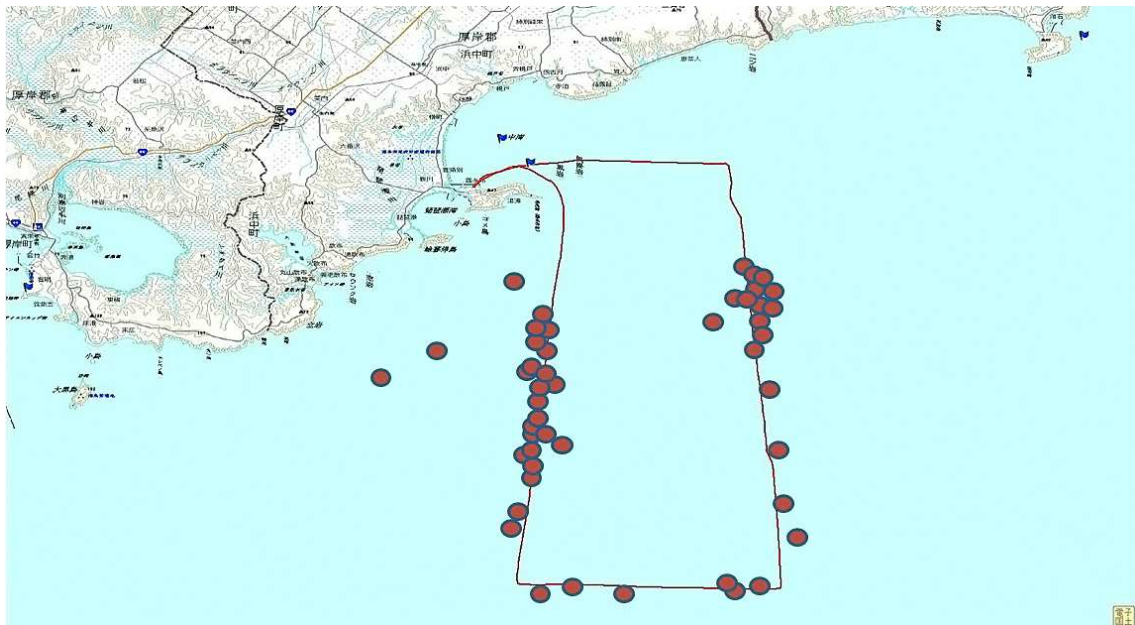


図 5. 2011～2013 年の霧多布海域におけるエトピリカの分布（NPO 法人エトピリカ基金 未発表データ）

本年度ほどの数ではないにしろ、霧多布沖では毎年本種の若鳥が観察されるが、それらが性成熟後に浜中小島やピリカ岩などの旧繁殖地に飛来している様子はみられない。霧多布海域は、繁殖に参加しない若鳥が採餌や休息を行うには良い（もしくは本年のように意図せずに分布している可能性がある）が、繁殖地としては不適な何かが存在するか、出生地へ帰還する傾向の強い海鳥の習性を反映して性成熟までに千島以北に帰ってしまうのかもしれない。今後も陸上と海上双方からのモニタリングで飛来状況を把握し、沖合の若鳥が旧繁殖地へ飛来しない状況が続く場合にはその要因の解明や除去、ヒナの人為的導入などの回復に向けた措置を講じる必要がある。

(5) エトピリカ以外のウミスズメ科鳥類各種の確認状況

① ハシブトウミガラス

7月3日に1羽が観察された。本種は中部以北の千島列島やベーリング海などで繁殖し、11月以降に渡来する冬鳥のため、本調査での確認が少なかったと思われる。

② ウミガラス

7月3日に1羽、同26日に10羽が確認された。道東でもかつてはモユルリ島、ユルリ島で繁殖していたが、1983年以降途絶え、現在では冬鳥である。ただし、隣接した歯舞諸島では繁殖しており、非繁殖個体または繁殖失敗個体が7月頃より道東海域に表れる。7月26日の10羽もそれらと思われる。

③ ケイマフリ

7月26日をのぞく3回で1～4羽が記録された。浜中町内でも小島や涙岬周辺で繁殖しており、その一部と思われる。本種は冬期におそらく北方から南下してきた個体が増えて、個体数が増加する。分布域は世界でもオホーツク海周辺に限られ、越冬個体数も含めた個体群動態のモニタリングが必要である。

④ ウミスズメ

7月26日に15羽、8月18日に2羽が観察された。2011～13年にはヒナを連れた家族群が観察されたが、本年は1歳以上の成鳥のみの確認であった。過去には根室市ハボマイモシリ島で巣卵の記録があり、現在でも当海域や十勝沖で家族群が観察され、繁殖ステージが天売島とは異なるため、道東から南千島に繁殖地の存在する可能性が高い。

⑤ カンムリウミスズメ

すべての回で確認され、7月26日には19羽が確認された。本種は伊豆諸島や九州近海など黒潮・対馬暖流の影響を受ける暖海で繁殖するが、繁殖後の7～10月には道東太平洋

に少なからず分布することが近年、当基金や NPO 法人日本野鳥の会十勝支部の調査によって明らかにされ、本州の研究グループがジオロケーターを装着した個体も夏から秋に北海道やサハリン沖まで到達していた。霧多布沖は本種の越夏域として重要な役割を果たしていると考えられ、世界でも日本近海のみに分布する本種の保全を進めるためにも洋上分布に関する情報を今後も蓄積する必要がある。

⑥ ウトウ

すべての回で観察され、最小は 7 月 3 日の 65 羽、最大は 10 月 9 日の 342 羽であった。本種は浜中町内に繁殖地はなく、隣接した根室市や厚岸町から飛来するものと思われる。7 月 26 日の 194 羽から 8 月 18 日の 89 羽へと数を大きく減らしたが、繁殖が終了してより北の海域へと移動したことが推察される。10 月 9 日には 342 羽と増加しており、北の海域から再度南下してきたのであろう。

⑦ ツノメドリ

7 月 3 日に 4 羽、同 26 日に 2 羽観察された。いずれも嘴の黄色や赤色が鈍く、顔の白色部が灰色みを帯びる第 1 回夏羽と思われる若鳥であった。

確認位置の水深は 4 羽 (66.6%) が 20～40m で、40～60m と 60～80m が各 1 羽だった (表 6 : 図 6)。陸岸からの距離は半数の 3 羽が 5km 以内、15～20km が 2 羽 (33.3%)、30～35km が 1 羽 (16.7%) だった (表 8 : 図 7)。

表 7. 本調査と 2011～13 年の水深ごとのツノメドリ確認数

水深(m)	確認数 (%)	
	本調査 (N=6)	2011～13 年(N=12)
0-20		
20-40	4(66.7)	2(16.7)
40-60	1(16.7)	7(58.3)
60-80	1(16.7)	2(16.7)
80-100		
100-120		
120-140		1(8.3)
140-160		
160-180		
180-200		
200-300		
300-400		
* 2011～13年データはNPO法人 エトピリカ基金による調査		

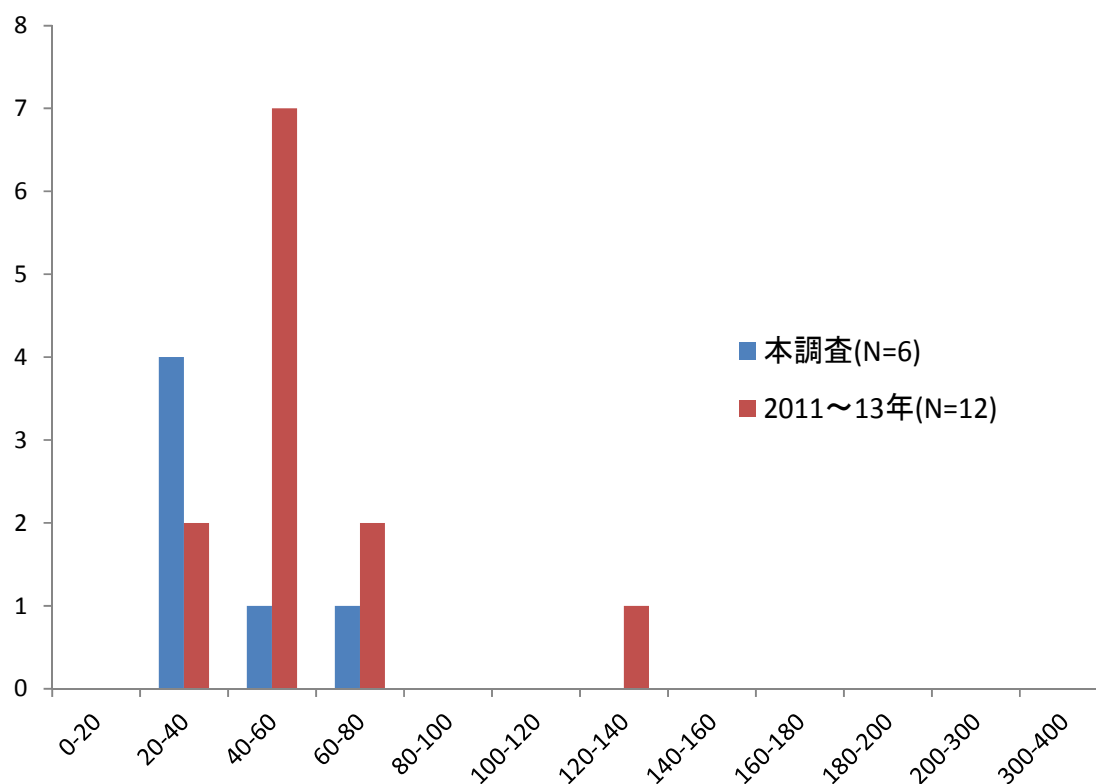


図 6. 本調査と 2011～13 年の霧多布海域における水深ごとのツノメドリ確認数

表 8. 本調査と 2011～13 年の陸からの距離ごとのツノメドリ確認数

陸からの 距離(km)	確認数 (%)	
	本調査 (N=6)	2011～13 年(N=12)
0-5	3(50.0)	1(8.3)
5-10		1(8.3)
10-15		3(25.0)
15-20	2(33.3)	4(33.3)
20-25		2(16.7)
25-30		
30-35	1(16.7)	1(8.3)
35-40		
40-45		
* 2011～13年データはNPO法人 エトピリカ基金による調査		

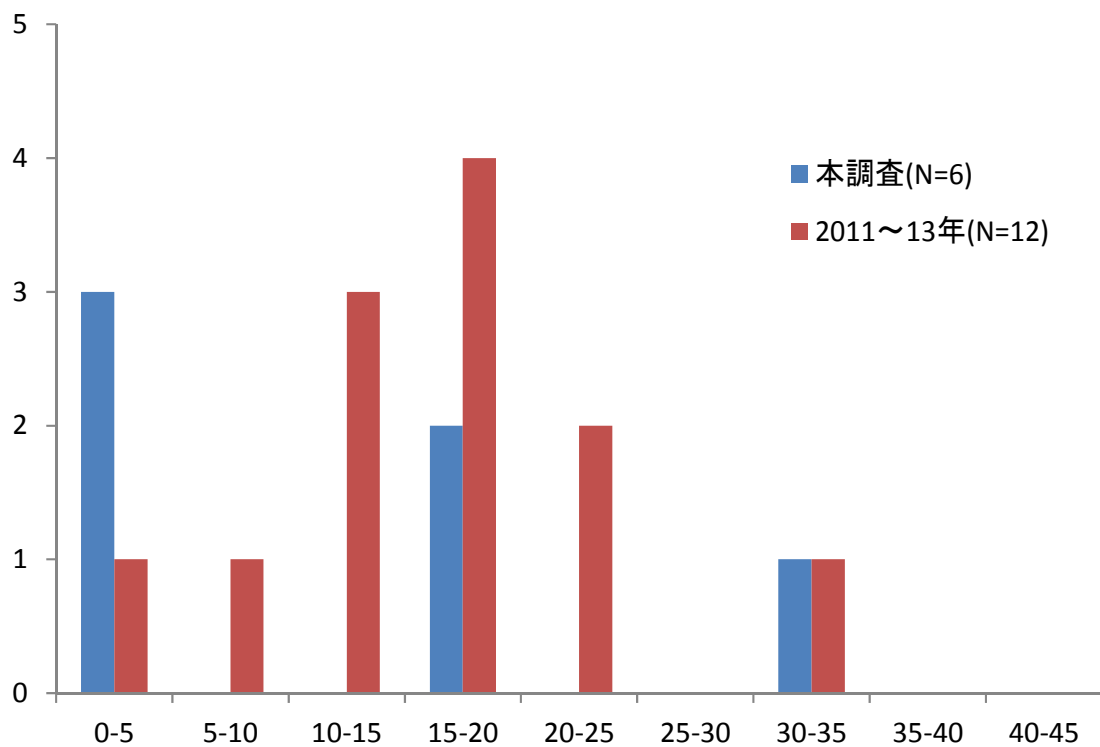


図 7. 本調査と 2011～13 年の霧多布海域における陸からの距離ごとのツノメドリ確認

夏期の霧多布海域に出現する本種の若鳥が、エトピリカより沿岸に分布する傾向は 2011～13 年の当基金による調査でも示されているが、それらと比較しても本調査での確認位置は著しく沿岸に偏っていた（図 8 ならびに図 9）。

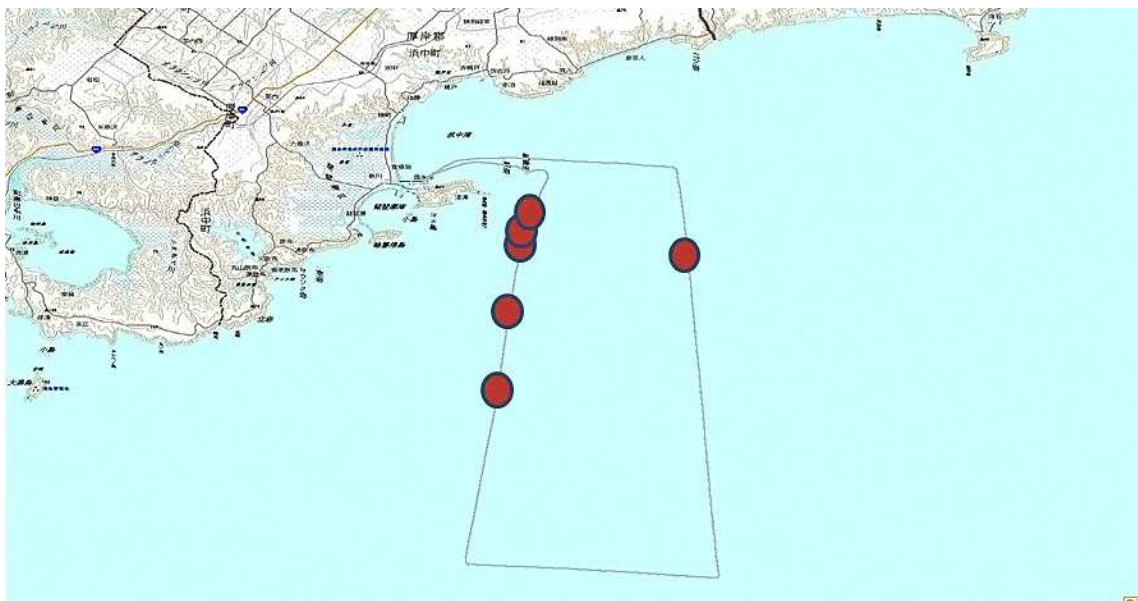


図 8. 2014 年 7 月の霧多布海域におけるツノメドリの分布

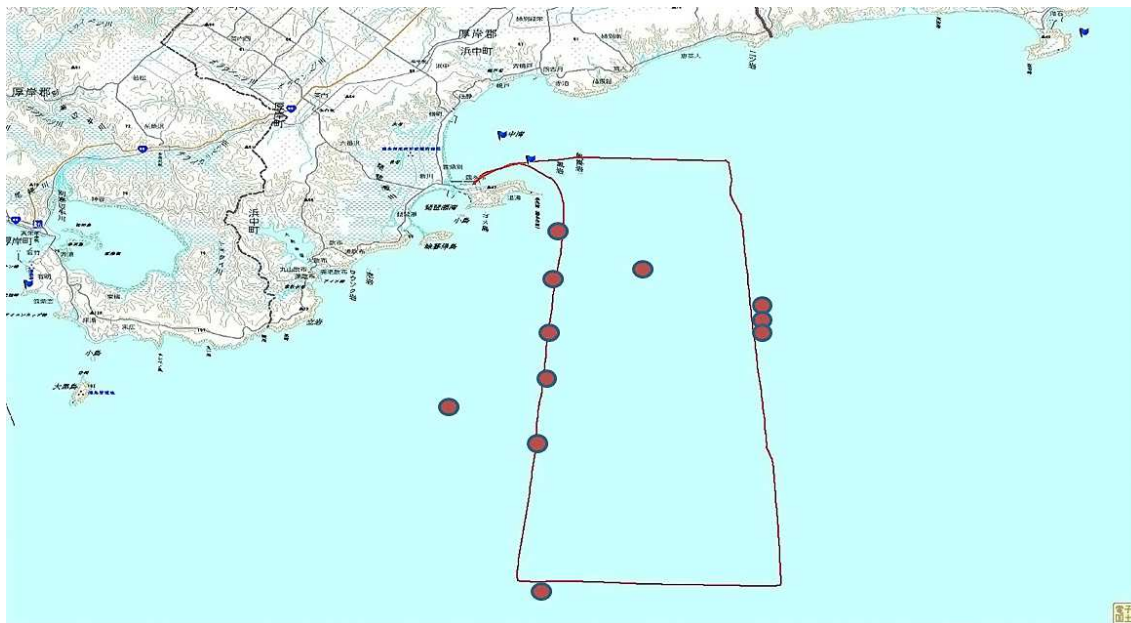


図 9. 2011～2013 年の霧多布海域におけるツノメドリの分布（NPO 法人エトピリカ基金 未発表データ）

要因は不明であるが、エトピリカと形態・生態的に近縁で似通った食性を持つことが推察されるため、エトピリカ同様、本来の分布域での海洋環境が不適で、沿岸親潮に乗って道東沿岸にたどり着いた可能性がある。北緯 45 度以北で繁殖する寒帯性の種であるため、北海道近海では稀な鳥だが渡来数は年によって異なり、霧多布沖では 2012 年にのべ 11 羽が観察された一方、2011 年は確認なし、2013 年は 1 羽のみだった。本調査での確認数は、2012 年に次ぐ多いものである。

(6) ウミスズメ科以外の各科の確認状況

① カモ科

シノリガモ、クロガモ、ウミアイサの 3 種が 10 月 9 日に少数観察された。これらは主に北海道より北で繁殖して越冬のために飛来する種で、同日は渡来初期に相当する。海ガモ類は世界的に著しい減少が知られており、当海域においても越冬期の海ガモ類の個体数モニタリングを実施すべきである。

② カイツブリ科

10 月 9 日にアカエリカイツブリ 2 羽、ハジロカイツブリ 1 羽が出現した。カイツブリ類は湖沼で繁殖し、非繁殖期に海上で観察される。近年、国後島でハジロカイツブリが増加したという話や釧路郊外で道東では少ないカンムリカイツブリが 20 羽近く観察

される事例もあり、当海域においてもカイツブリ類の動向を注意深く監視する必要がある。

③ アビ科

アビ、オオハム、シロエリオオハムの 3 種が記録された。アビとオオハムは 10 月 9 日に 1~2 羽が観察されたのみだったが、シロエリオオハムは 7 月 3 日をのぞくすべての回で 12~28 羽が確認された。夏に観察された大部分が第 1 回夏羽の若鳥であり、非繁殖個体が越冬しているものと思われる。出現地点は浜中湾内が圧倒的に多く、浅海で底生魚類などを餌に夏を過ごしているようである。

④ アホウドリ科

コアホウドリ、クロアシアホウドリの 2 種が出現し、前者は 12~63 羽、後者は 23~141 羽が記録された。両種とも 8 月 18 日に個体数が最大であった。十勝沖ではコアホウドリは初夏と秋、クロアシアホウドリは夏の後半の海水温の高い時期に個体数が最大を迎える。本調査において明瞭な傾向は認められなかったが、クロアシアホウドリは 8 月 18 日（表面海水温 17℃前後）の 141 羽から 10 月 9 日（表面海水温 15℃前後）の 37 羽と激減し、海水温の低下に伴って当海域から飛去すると考えられた。

⑤ ミズナギドリ科

フルマカモメ、オオミズナギドリ、ハイイロミズナギドリ、アカアシミズナギドリの 4 種が確認された。フルマカモメはすべての回で出現し、最大は 10 月 9 日の 216 羽、最小は 8 月 18 日の 9 羽であった。本種は中部以北の千島列島やオホーツク海北部など北海道より北で繁殖するため、繁殖期の 7、8 月に見られるのは若い非繁殖個体を中心であると思われるが、寒流系の種であり、海水温の高い 8 月下旬にはより北の海域まで移動するのかもしれない。オオミズナギドリは 7 月 26 日以降に確認され、同日は 1 羽、8 月 18 日は 5 羽と少なかったが、10 月 9 日には 528 羽が出現し、ハイイロミズナギドリに次ぐ優占種であった。本種は道南日本海沖の渡島大島でごく少数が繁殖するものの、大部分は伊豆諸島や本州沿岸で繁殖する鳥が季節によって道東太平洋まで到達すると思われる。しばしばカマイルカと一緒にイワシやサバの魚群を追っている姿が目撃される。9~10 月は十勝沖や釧路沖でのイワシ、サバを対象としたまき網漁が盛んな時期でもあり、本種の卓越は餌生物の分布と関連している可能性がある。ハイイロミズナギドリはすべての回で出現した。最大数は 10 月 9 日の 2658 羽、最小数は 8 月 18 日の 106 羽だった。例年、6~8 月にも数千羽の群れが観察されるが、今年度の同時期はいずれも 1000 羽以下だった。本種と同じく魚食性の強いウトウと同所的に観察されることが多く、今年度は 10 月をのぞいてウトウも例年より少なかった。何らかの要因により、霧多布近海で局所的に餌となる魚の少なかった可能性がある。アカアシミズナギドリは

すべての回で記録されたが、1回あたりの確認数は1～12羽と少なく、最大は10月9日（12羽）であった。本種は道東太平洋では少ないが、根室海峡では8月下旬以降に多数観察されることがあり、日本海を北上して宗谷海峡からオホーツク海に入った群れが通過する際に出現し、道東太平洋にはその一部が飛来するのかもしれない。

⑥ ウミツバメ科

コシジロウミツバメ、ハイイロウミツバメの2種が確認された。コシジロウミツバメは7月3日にのみ65羽が記録された。本種は町内のケンボッキ島で約7000つがい繁殖するほか、隣町の厚岸町大黒島は10万羽以上の国内最大の繁殖地であるが、過去の霧多布沖の調査ではまったく確認できず、より沖合か、湧昇など特定の海洋学的性質を持つ海域に集中する可能性が考えられていた。しかし、本調査から日によっては霧多布沖にも多数出現することが明らかとなった。その要因は現時点ではまったく不明であるが、これまでほとんど記録のなかった十勝沖でも7月に約30羽が出現しており、年や季節による洋上分布の変化が生じるのかもしれない。また、本種を含むウミツバメ類は英語で「Storm-petrel」と言われるとおり、時化や降雨時に多く見られることが経験的に知られている。当日は通常に比べてやや波があり、時折霧雨のちらつく曇天であったことから気象的な要因も重要な可能性がある。海が風いだ状態ではウミツバメ類は海面で休んでおり、船からの発見は困難との意見もある。ハイイロウミツバメは7月3日に11羽、同26日に1羽が観察された。本種はフルマカモメ同様、北洋で繁殖する寒流系の種であるが、夏期にも北海道近海で見られ、その数には日による変動が大きく、何が分布を規定するのかはわかっていない。

⑦ ウ科

ヒメウとウミウが記録された。ヒメウは7月3日に2羽、10月9日に75羽出現した。日本では大部分が冬鳥であるため、移動期の10月に確認数が増加したと思われる。ホカケ岩や黒岩周辺では少数の若鳥が越夏するが、7月26日以降の3回で確認されたウsp.には本種も含まれる可能性が高い。黒岩は航路からは距離があつて種まで同定できない場合が多かった。ウミウはすべての回で出現し、最大は10月9日の38羽、最小は7月3日の9羽であった。本種は霧多布岬や小島で繁殖するが、近年はオジロワシやカラス類による幼鳥や卵の捕食によって繁殖成績の悪化が懸念されている。海上での確認数や分布も個体数変動の指標になると考えられ、今後の動向に注目する必要がある。

⑧ アマツバメ科

アマツバメが7月の2回と8月18日に出現し、その大半は港内でのものであった。7月26日には浜中湾内を飛ぶ1羽が観察された。

⑨ シギ科

アカエリヒレアシシギ、ハイイロヒレアシシギの 2 種が記録され、1 回あたりの確認数は前者が 6～58 羽、後者が 48～121 羽であった。アカエリは 7 月 26 日と 8 月、ハイイロは 7 月 3 日以外の各回で観察され、北極圏での繁殖後の南下渡り中であつたと思われる。

⑩ カモメ科

ミツユビカモメ、ユリカモメ、ウミネコ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメの 8 種が出現した。ミツユビカモメは 10 月 9 日にのみ 487 羽が記録され、南下渡りの時期であつたと思われる。知床半島周辺では前年生まれの若鳥が越夏しているが、当海域では確認されていない。ユリカモメは 10 月 9 日に 1 羽だけ観察された。カモメ類の中でもとりわけ内湾や干潟、河川などに分布するため、沖合では少ないものと思われる。ウミネコはすべての回で出現し、最大は 7 月 26 日の 45 羽、最小は 7 月 3 日の 11 羽であつた。本種はケンボッキ島で数千羽が繁殖を試みているが、オジロワシやカラス類による捕食・攪乱でヒナはほとんど出ていない。沿岸域や漁港に多く、本調査での確認数は上記のとおり少なかった。カモメは 10 月 9 日に 1 羽が出現したのみだつた。9 月下旬から渡来する冬鳥でまだ数が少なかったこと、大河の河口などで大群を形成する傾向のあることが本調査で少なかった理由と考えられる。ワシカモメは 10 月 9 日に 2 羽、シロカモメも同日に 1 羽が記録されたのみである。これら 2 種の冬鳥は元来そう多い鳥ではないのにくわえ、渡来初期でまだ数が少なかったものといえる。セグロカモメは 10 月 9 日に 109 羽が出現した。道東における本種の秋の渡りは 8 月末に始まり、10 月中には大部分が南下するため、活発に渡っていたと思われる。オオセグロカモメはすべての回で出現し、最大は 10 月 9 日の 191 羽、最小は 7 月 3 日の 45 羽だつた。10 月 9 日に数が多かったのは繁殖期が終わって離島や岬などの陸上から離れていた上に、沖合で複数の漁船が操業していてそれらからの廃棄物を狙つてのものであろう。同日に 430 羽記録された「カモメ類」も本種がその多くを占めている可能性が高い。調査範囲外の霧多布漁港防波堤では、7、8 月に多くの本種が繁殖しているのが往き帰りの際に観察された。

⑪ トウゾクカモメ科

オオトウゾクカモメとトウゾクカモメが記録された。オオトウゾクカモメは 8 月 18 日に 7 羽、10 月 9 日に 2 羽見られた。本種は北海道では迷鳥とされるが、当海域や十勝沖、本州とのフェリー航路上などでは 6～10 月に繰り返し観察されており、少数が定期的に飛来するものと思われる。トウゾクカモメは 7 月 26 日に 1 羽および 10 月 9 日に 47 羽を記録した。10 月は秋の渡り期である。大部分の出現は単独か数羽だつたが、操業中の漁船にカモメ類が群がる海域で 20 羽が見られる一幕もあつた。

⑫ タカ科

オジロワシが 1 羽、8 月 18 日にホカケ岩の頂部に止まる 1 羽が観察された。そのため、普段は同部分に群れで止まっているウ類の姿はなかった。道東では繁殖つがいや越冬する若鳥が増加しており、捕食や攪乱による海鳥への影響も無視できないレベルになっている。

⑬ カラス科

ハシブトガラスが 7 月 26 日に霧多布港内で観察された。

⑭ セキレイ科

ハクセキレイが 10 月 9 日に霧多布港内で出現した。

第 2 部 海獣類その他

海獣類は鰭脚類 2 種ならびに鯨類 4 種が記録された（表 9）。

表 9. 調査日ごとの海獣類その他の種またはカテゴリ別確認数

No.	分類	科名	種名／月日	7		8	10
				3	26	18	9
1	海獣	アシカ	キタオットセイ	14	1		
2	海獣	アザラシ	ゼニガタアザラシ	39	18		
3	海獣	ナガスクジラ	ミンククジラ		2/2	1/1	
4	海獣	マイルカ	カマイルカ			2/22	3/40
5	海獣	ネズミイルカ	ネズミイルカ		1/1	4/6	1/1
6	海獣		イシイルカ	7/26	5/18	21/56	
7	魚類	マンボウ	マンボウ	3	59	8	3
8	魚類		サメ類		6	5	6
9	昆虫	トンボ	ウスバキトンボ		1		
10	昆虫		チョウ類			1	
11	海獣		鯨類不明種	1/3			
12	海獣		イルカ類			1/1	
* 鯨類の／の左側は群れ数で右側が個体数							

鰭脚類のうちキタオットセイは 7 月 3 日に 14 頭、同 26 日に 1 頭が観察された。繁殖地は中部千島やサハリン、コマンドル諸島などで既に繁殖期に入っていることから、観察されたのは性成熟前の若い個体を中心であろう。7 月 26 日に確認数が激減し、その後は観察されなかったのは季節的な海水温の上昇に伴う餌生物の分布の変化などが関連している可能性がある。ゼニガタアザラシは 7 月 3 日に 39 頭、同 26 日に 18 頭がホカケ岩ならびに周辺の岩礁へ上陸しているのが観察された。沖合調査はゼニガタアザラシの上陸数の多い干

潮時や波のない時に必ずしも実施していないので、季節変化の個体数変動をどの程度反映しているかは不明だが、本調査で確認できなかった 8 月下旬以降は浜中湾北部の岩礁への上陸数が増え、過去に個体の移動も確認されていることから、ホカケ岩周辺の個体数は減少しているのかもしれない。沖合調査とは別に実施した【海獣繁殖状況調査】では、繁殖期の 5 月を中心に親子を含む本種が多数観察されており、ホカケ岩は繁殖期に集中的に利用される上陸場であると考えられる。上記調査も含め、上陸個体はほぼすべて、体表の斑紋を利用して行う個体識別用写真を撮影できた。今後、ゼニガタアザラシ研究者で構築しているデータベースに登録して共有を図ることで、上陸場間の移動や繁殖履歴など生活史の解明への貢献が期待できる。

鯨類はミンククジラ（3 群 3 頭）、カマイルカ（5 群 62 頭）、ネズミイルカ（6 群 8 頭）、イシイルカ（33 群 100 頭）の 4 種が確認され、ほかに不明種 1 群 3 頭、イルカ類 1 群 1 頭が出現した。本調査は 7～10 月のみなのでこれら鯨類の数や分布の季節変化については明らかにできていないが、GPS データを用いて群れの確認位置を地図上に落とした（図 10）。

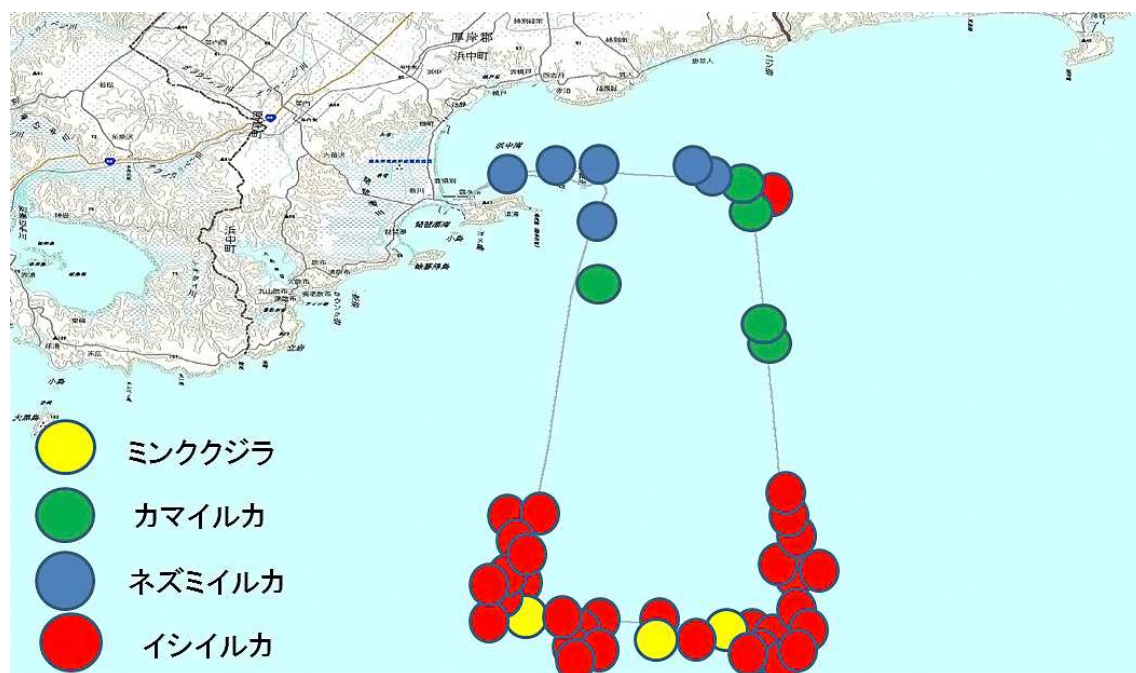


図 10. 本調査での霧多布海域における鯨類 4 種の分布

分布の種間の違いはネズミイルカとイシイルカで特に明瞭で、ネズミイルカが水深 20m 前後の沿岸、特に浜中湾内に分布するのに対し、イシイルカの確認位置は 1 例をのぞいて調査コースの最沖側に当たる水深 100～200m 前後の外洋に集中していた。北海道近海のネズミイルカの食性に関する情報は乏しいが、根室半島の秋サケ定置網で混獲された 3 頭の胃内容物はコマイ、カジカ科、タウエガジ科、イカナゴ属など沿岸底生魚類が主であった。このことから、当海域においても同様に沿岸の魚介類を食べるため陸地から近い浅海に分布しているのかもしれない。イシイルカはスケトウダラやホッケ、ドスイカなども食べる

が、中深層性のハダカイワシ類やイカ類も重要な餌生物である。中深層性の種は日中は水深 200m より深くにいるが、夜間には水深 200m 以浅まで日周鉛直移動によって浮上して来る。イシイルカは水深 100~200m の大陸棚付近に分布することによって、昼間は表中層魚などを機会的に採餌しながら、夜間に浮上して来る中深層性の餌生物を狙っている可能性がある。鯨類の食性に関する情報を得ることは難しいが、漂着あるいは混獲死体を積極的に活用すべきであろう。カマイルカは浜中湾内には入らないが、隣接した調査コースの北側での出現が多く、1 群あたりの頭数が多いのが特徴であった。本種はイワシやサバの魚群のいる海域に集中する傾向が強いためと思われる。比較的暖海性の種で道東太平洋では夏から秋にのみ見られ、本調査では 8 月以降に出現した。ミンククジラは例数が少ないが、いずれもイシイルカの集中が見られる大陸棚付近で単独で出現した。一般にヒゲクジラ類はオキアミ食性が強いが、釧路沖では魚類も多く捕食していることが知られている。

海獣類以外ではマンボウ、サメ類、ウスバキトンボ、チョウ類が観察された。マンボウとサメ類は調査 1 回あたり 10 頭以下のことが多かったが、7 月 26 日には 59 頭のマンボウが出現した。これなどは暖水塊が当海域付近に入り込んでいたことを示唆するものかもしれない。沖合に出られる機会は限られるため、このような博物学的な事象も含めて記録し、海鳥をはじめとした海洋動物にとっての霧多布の海を明らかにしてゆく必要がある。

写真（その1）



写真1 第八栄徳丸(8/18)



写真2 調査風景(10/9)



写真3 エトピリカ若鳥(7/26)



写真4 エトピリカ若鳥(7/26)



写真5 カンムリウミスズメ(7/26)



写真6 カンムリウミスズメ飛翔(7/26)



写真7 カンムリウミスズメ生殖羽(10/9)



写真8 浮上するカンムリウミスズメ(10/9)

写真（その2）



写真9 ウトウ飛翔(7/26)



写真10 ツノメドリ(7/26)



写真11 コアホウドリとクロアシホウドリ(10/9)



写真12 コアホウドリ(10/9)



写真13 コアホウドリ飛翔(10/9)



写真14 クロアシホウドリ飛翔(7/26)



写真15 フルマカモメ(10/9)



写真16 フルマカモメ飛翔(10/9)

写真（その3）



写真17 ハイロミズナギドリ(10/9)



写真18 ハイロミズナギドリ飛翔(7/26)



写真19 アカアシミズナギドリ(手前 10/9)



写真20 コシジロウミツバメ(7/3)



写真21 ヒメウ(10/9)



写真22 アカエリヒレアシシギ(7/26)



写真23 ハイロヒレアシシギ(10/9)



写真24 ミツユビカモメ成鳥冬羽(10/9)

写真（その4）



写真25 ミツユビカモメ第1回冬羽(10/9)



写真26 オオトウゾクカモメ(8/18)



写真27 トウゾクカモメ(10/9)



写真28 イシイルカ(7/26)